

# なんや何でも屋のジャック



「おや! 君はだれだい?」

「ぼ、ぼくの名前は、ジャック。」

「聞こえないよ!」

「ジャックです!」

「なまりがあるね。お国はどっちだい?」

「ああ・・・ス、スイス。ぼくはスイス産です。」

「なら、どうしてハンター夫人はたった今、君を  
ぼくたちといっしょにしたんだい? 油を差して

きれいにしてもらうためかい？」

「わからないけど、ぼくを何かに使いたいんでしよう。」

「一体何のためか、見当もつかないな。これだけ仲間がそろってるんだぜ。」

ジャックはおずおずと、同じ木箱の中おな き ばこ なかにいる新しい仲間たちを見て、自分も同じ事を考えていることを認めざるを得ませんでした。

「ワインのびんを開けるためかな。」彼は低い声かれ ひく こえでつぶやきました。

「ワインのびんだって？」ほかの者が聞き返しました。「一体、何を使って開けるのさ？」

ジャックはパツと横よこになると、キーキーきしみながら、苦労くろうしてコルク抜きぬを出しました。

するとみんな、どっと笑いました。

「そのちっちゃな突き出たもので？」ペンチに似た曲線美まげくせんびの工具こうぐが、かん高い声だか こえ いで言いました。

ジャックはしょげた様子ようすでコルク抜きぬをしまいました。「からかって悪わるかったわ、ぼうや。ところで、あたしなまえの名前はクライン。ワイヤーストリップーよ。」

「ぼくも、同じことができますよ。」自分の体からだを見回みまわしながら、ジャックが言いました。「この辺へんにあるんだけど・・・。」

「そんなこと、どうでもいいのよ。」とクライン。「それよりも、どうしてジュディ・ハンターがあなたつかを使つかいたいわけ？ ここに仲間のウイングなかまがいるのに？」彼女は、長い両腕りょううでの間に長いコルク抜きぬの付いた珍ちんみょう妙めうな道具どうぐを指差ゆびさしました。

「やあ、ジャック。」ウイングは自信じしんたっぷりわら いに笑わらって言いいました。「わかると思おもうが、おれ様さまあ、

ただのコルク抜きぬじゃないんだぜ。最近さいきんのスクリュールよって呼よばれてる、特別なとくべつワインせんぬの栓せんぬ抜きぬだよ。」

「彼は、ハンター家けのしゃれたパーティーにはかなら必ず呼よびがいかかるの。」とクラインが言いいました。「それで、バーでぶらぶらしてくるわけ。」

「そういうことさ。ある時ときなんぞは、派手はでなパーティーをややってて、ジェフ・ハンターがととっておきのワインしを自じまんしてたんだがね。いざびんあを開あけようと、イタリア製せいの派手はでで小柄こがらなエンリコちゅうコルクせんぬ栓と抜きだを取り出としたが、どうにもこあうにも開あけられなくかわってな。コルクが乾かわいちまあてもまろくなぶたってたから、真まっ二ふたつわに割われてしまあったのさ。そういう危き機き的てきな状じょうきよう況きになとった時とき、ジェフが手てをのおちぼすのはだれだと思おもうかい？」

「ウイングさんってわけですね。」ジャックが答こたえました。

「そういうことよ。そいでポンと開あいて、みんな満足まんぞくさ。」ウイングが作り笑つく わらいをして言いいました。

「とにかく、そのほかのみんなも紹しょうかい介かいしたらいかげでしよう。」壁かべによりかかっている、印象いんしょうてき的なリールの付ついた長ながいつりざおが気取きどって言いました。「それが礼儀れいぎというものでしょう。わたしは、ロッド・フィッシャーもうと申まうします。ジェフが魚さかなつりに出でかける時ときは、必かならずわたしつを連いれて行いきます。わたしがいなければ、何なにもつれなせんからね。」

「ぼくも、ちょっとした魚さかなつりになら使つかわれたこといがあります。」ジャックがおずおずと言いいました。

「でもロッドなら、確かくじつ実に魚さかなを引ひき寄よせられる

わよ。」 そう言うと、クラインは次に大きなネジ回しのフィリップスを紹介しました。見たところ、彼は昼寝をしていたようで、新入りを見るのに片目を開けたただけでした。

「うわあ！」 ジャックが声を上げました。「ぼく、いつも本物のフィリップス社製の専用ネジ回しに会いたいと思っていました。ぼくもたまにちょっとしたネジ回しの仕事をするので、これなんですけど・・・」 ジャックは自分のネジ回しを引っ張り出そうとしましたが、出てきません。それに、フィリップスが目を閉じて、向こう側に寝返りしてしまったので、あきらめてしまいました。

「やあ、おれ様はスタンリー。みんな、おれ様のことを『クールなスタン』って呼んでるんだ！」 短いピカピカの刃を持つ、がんじょうそうな黒いカッターナイフが口をはさみました。

「ボンジュール、スタンリーさん。」 ジャックはむっつりと返事しました。「実は、ぼくも・・・。いや、どうでもいいや。まあとにかく、ぼくは結構役に立つんです。」

「ですが、そんなに体がサビついてて、なかなか工具が出せないなら、どうやってお役に立てるのですか？」 とロッドが聞きました。

「そうだよな。」 とスタンリー。「自分の工具を見せるのにも苦労してるんじゃない。」

「でも、ぼくは1日中使われていたんです。」 とジャックが答えました。「ジュディスが誕生日にご主人からプレゼントされて以来、ぼくはずっと彼女のハンドバッグに入れて、どこへ旅するにもいっしょだったんです。」

「それで、何が起きたんだい？」

「空港の規制がきびしくなったんです。それで彼女は、ぼくを持ち歩いていると、セキュリティやら何やらでいろいろと面倒なことになると思ってたんでしょう。」

「強制退職の結構な言い訳ですね。」 ロッドがクスッと笑って言いました。

「それで、ジュディスは君を何に使ってたんだい？」 とウイング。

「あらゆることにちょこちょこ使っていました。切ったり、ネジをしめたり、ちょっとした修理なんかです。」

「そういうことですか。」 とロッド。「何でも屋で・・・」

「秀でた技はない。」 ほかのみんなが口をそろえてきっぱりと言いました。

「そういう言い方はいやなんですけど。」 とジャック。「今までだって、いいと思ったことはありませんし。」

「どうしてだい？」

「だって・・・自分が役立たずに感じますから。」

ジャックの一言で、工具や器具たちはみんな、だまってしまいました。聞こえるのは何人かのせきばらだけです。

「それに、ぼくは役立たずじゃありませんでした！ ジュディスは、いつもぼくを使ってましたから。」

「そんな仕事、だれがしたいか？」 とフィリップスが言いました。「働きすぎさね。」

「だけど、仕事をしてないから、油を差してもらったりきれいにしてもらえないでいるんです。」 とジャック。「それで、接合部がこわばってきしる



ようになっちゃったんです。望むほどに使われていないからです。」

「おめでたいやつだ。」あくびをしながら、フィリップスが言いました。「おれなんか、ジェフに大工仕事で使われた後は、さっさと帰ってのんびりして、何もしてねえぞ。ネジを回すのが自分の仕事なら、それだけをしてりゃいいのさ。働きすぎがいいなんて、全然思わねえ。働きすぎるよりは、ちょっとくらいサビてても、そのほうがましさ。『自分の専門分野に留まれ』がおれのモットーだからな。」

「あたしもよ。」とクライン。「そうでなけりゃ、まんまと付け込まれるだけだわ。」

「でもぼくは、しょっちゅう使われるほうが楽しかったです。」そう言って、ジャックははずかしそうにほほえみました。

その時です。ドアが開いて、背が高く日焼けしたブロンドの女の人が、同じくブロンドのほっそりした8才ぐらいの女の子とっしよに入ってきました。

「またジュディだ。」とフィリップスがささやきました。「それに、娘のメイヴィスもっしよだぞ。」

ジュディは木箱の中からジャックを取り出してテーブルの上に置きました。そして、棚から機械油を取ると、ジャックのナイフの刃をそっと引き出し、接合部に油を1滴差しました。彼女は他の部分も同じように1つ1つ引き出して、入念に油を差しました。1滴油を差すと工具部分を注意深く出し入れし、キーキーしまなくなるまで動かしました。はじめの内ジャックは痛い思いをしましたが、しばらくすると体がほぐれ

てすべりがよくなりました。

すると家の電話が鳴ったので、ジュディはジャックを木箱にもどしました。

「真っ先にきれいにしてもらえましたねえ、ジャック。」とウイング。「一体どうしてあなたが優遇されるのでしょうか?」

ジャックは肩をすくめました。「わからないけど、理由が何であれ、彼女はサビを取ってくれた。ウソみたいに気分がいいです。」そう言いながら、ジャックは晴れやかな表情で工具の1つをサッと出してみせました。

「それにしても、一体ハンター夫人は、わたしたち達人の中に混じったあなたをこれから何に使おうというのでしょうか?」

「わからない。・・・ひもを切ったり、野菜をスライスしたり・・・いろんなことでしょう。」

みんながどっと笑いました。

「ひもや野菜か!」笑いすぎてスタンリーは涙を流しながら言いました。「お前のを見せてやれよ、ウィルキンソン。」

すらとした鋭い狩猟ナイフが飛び起き、取手の部分を器用にひとひねりすると、物置小屋の木の壁にグサッとささりました。

スタンリーはわざとらしく笑ってジャックの方に向きました。「なかなかのもんだろ?」

「大したものですね。」ジャックはしょげた表情で言いました。

「ウィルキンソンがひもや野菜だけ切ってるなんて、想像できないだろ、ジャック?」

「お前だって、なかなかやるじゃないか、スタン。」とウィルキンソンが言いました。「この前、

お前が木を薄く切り取るのを見たぞ。」

「まあな。おれだって、多少削ったりなんかはするよ。」

「じゃあ、薄切りは苦手かしらね、ジャック？」とクライン。「でも、ほかのことができるでしょ。」

「ええっと・・・。缶を開けられます。」

クラインは人をばかにしたようにまゆをつり上げました。

「缶切りねえ？」彼女はジャックの関心をカウンターの上に促しました。そこには、壁のコンセントにプラグを差し込まれた大きなプラスチックの器具がありました。「あれが、缶切りというものよ。そうでしょ、キャンディ？」

「は〜い。汚れ知らず、手間知らずの全速力で、ビューン。」

「ですから、専門的にやるのは大切なことなのです。」ロッドがていねいな口調で言いました。「わかりますか、何でも屋のジャック君。ここに

いるわたしたちは・・・その・・・専門家なのですよ。」

「そういうことだ。」とスタン。「1つの分野の仕事だけやる、専用の精密工具なのさ。」

「1つだけの技、職業、技能、サービスを、完ぺきにこなすのよ。」とキャンディ。「それにね。」とクライン。「あまりにも融通が利きすぎていつも使われているなら、自分だけの時間がないじゃないの。」

「それにですね。」とロッド。「結果として、例えば大工や料理人が、仕事に最も適した専用の器具や工具や道具を使ってやる以上に良い仕事ができることは、決してありませんからねえ。」

「だけど、みんなが言う『専用用具』がすぐそばになかったら？」答弁するようにジャックが聞きました。「そのあわれな人は、どうするんですか？」

「そうですねえ。」とロッドが答えます。「その人は、本当なら仕事をもっとよくできたはずなのになあと思いつつながら過ごすでしょうね。あれさえあれば・・・と思いつつながらね。」

「つまり、キャンディがいれば豆の缶詰がもっと早く開けられて、味ももっとおいしくなるんですか？」とジャックが口をはさみました。「もしウィルキンソンが野菜を切ってくれれば、味ももっとよくなり、ワインも、ウイングがいればもっとおいしくなるんですか？」

「君の言いたいことはわかったよ、ジャック。」とウイングが言いました。「だけど、仲間の工具や器具たちは、君にはぼくたち専門の達人から学ぶことがたくさんあるってことでは同じ意見だと思つよ。」

「それは確かですね。」とジャック。「だけど、そういう専門の分野でみんなにかなうような速さや技能や大きさは、もともとぼくにはないって言いましたよね。」

「じゃあ、無理する必要はねえんじゃないか？」とフィリップス。

「そういうことだな。」とスタンリー。「つまりよ、最高のものになれないんなら、あきらめて引っ込んでろってことよ。」

「もうこれ以上話し合う必要はないと思いつつ、」とロッドが言いました。「あわれな何でも屋のジャック君は、自分がひどくおとっているように感じているにちがひありません。教訓を学

んだと言え**ば**十分**で**しょう。それでは、強**制**退

職**生**活をお**楽**しみ**く**ださい、ジャック君。」

器具**や**工具**た**ちは、ジャックが役**立**た**ず**に思  
える自**分**の将**来**に思**い**を**め**ぐ**ら**せる**ま**まに**し**て  
お**い**て、自**分**た**ち**の会**話**に**も**ど**っ**て**ま**た冗**談**を  
言**っ**たり**笑**ったり**し**始**め**ました。ジャックは、自  
分**の**拡**大**鏡**を**見**て**思**い**出**し**ました。ジュディス  
の息**子**ジミーは、自**分**を**使**って太**陽**の**光**を**集**め、  
木**の**板**に**彼**の**名**前**を**焼**き**付**けた**っ**け。その板**切**  
れ**も**、ジュディスが自**分**の**小**さ**な**の**こ**ぎ**り**を**使**っ  
てカ**シ**の**木**から**切**り**取**った**ん**だ**っ**た**な**あ。

ジュディスの**コ**ン**ピ**ュ**ー**タ**ー**から木**ネ**ジ**が**は**ず**  
れ、彼**女**がジャックを**使**ってそれ**を**し**め**直**し**た**時**  
の**こ**とを**思**い**出**すと、ジャックは思**わ**ず**な**つ**か**し  
そ**う**に**ク**ス**ッ**と**笑**いました。今**で**は**取**る**に**足**ら**な  
い**こ**と**の**よ**う**に**思**え**ま**す**が**、ある**時**な**ど**は、ジュ  
ディスが休**日**に**1**人**っ**き**り**だ**っ**た**時**、**コ**ー**ヒ**ー  
メ**ー**カ**ー**の**プ**ラ**グ**を**変**え**る**た**め**に、ジャックが  
ワイ**ヤ**ー**ス**ト**リ**ッ**パ**ー**代**わり**に**な**る**こ**と**を**発**見**し**、  
ジャックを**持**って**き**て**よ**か**っ**た**と**喜**ん**だ**こ**と**も**あ  
り**ま**した。また、ハイ**キ**ン**グ**中**に**大**ケ**ガ**を**したジ  
ミーの**手**当**て**を**す**る**た**め**に**、ジュディスがジャッ  
ク**の**小**さ**な**は**さ**み**を**使**って包**帯**を**作**った**時**の**こ**と  
も**思**い**出**しました。

そう**さ**う、方**位**磁**石**も**使**い**ま**した**っ**け。その  
運**命**の**旅**では、ジャックは暗**い**森**中**で**ま**よ**っ**た  
ジュディスとジミーが**主**要**道**路**に**出**る**の**を**導**き**ま  
した。彼**ら**はヒ**ッ**チ**ハ**イ**ク**を**し**て自**分**の**カ**ン**プ**  
場**に**も**ど**る**こ**と**が**で**き**た**の**です。そんな**な**つ**か**し  
い**思**い**出**で**い**っ**ぱ**い**で**した。だ**け**ど、今**は**ど**う**で  
し**ょう**？

太**陽**は**し**ず**み**、物**置**の**明**かり**も**消**え**て**い**ます。

木**箱**中**で**じ**っ**と横**に**な**っ**て**他**の**工**具**た**ち**が**お  
しゃ**べ**り**す**る**の**を**聞**いて**い**たら、そ**ん**な**幸**せ**な**  
思**い**出**も**、悲**し**み**に**取**っ**て**代**わ**っ**て**し**ま**い**ました。  
す**る**と**そ**の**時**です。扉**が**開**い**て、白**熱**球**が**こ  
う**こ**う**と**つ**き**ま**し**た。工**具**た**ち**は**話**を**や**め**て**、ジェ  
フ・ハン**タ**ー**が**一**体**何**の**た**め**に**来**た**の**だ**ら**う**と**考  
え**て**い**ま**した。

「大**工**仕**事**の**仕**上**げ**か**な**。」ジェフが工**具**箱**の**  
中**を**く**ま**なく**探**っ**て**い**る**の**を**見**て**、スタン**リ**ー**が**  
い**い**ました。

「それ**と**も、ゆる**ん**だ**ネ**ジ**を**し**め**直**し**た**い**の**か**  
な。」とフィ**リ**ッ**プ**ス**が**さ**さ**や**き**ま**し**た。

「それ**か**、お**そ**い**夜**の**パ**ー**ティ**ー**を**開**く**こ**と**に**し**  
た**の**か**な**。」とウ**イ**ン**グ**。「今**夜**は**ビ**ジ**ネ**ス**関**係**の**  
知**り**合**い**を**招**く**っ**て**話**して**ま**した**か**ら**ね**。た**く**さ  
ん**の**ワ**イ**ン**の**び**ん**を**開**け**る**の**か**も。」

「もし**そ**う**な**ら、と**っ**く**の**前**に**あ**ん**た**が**呼**び**出  
さ**れ**て**た**は**ず**で**し**よ。も**う**2**時**間**く**ら**い**は**テ**ー**ブ**ル**で**  
食**事**して**た**の、**気**が**つ**か**な**か**っ**た**？**もし  
か**し**たら、停**電**した**の**か**も**。」とクラ**イ**ン。

「き**っ**と**停**電**で**す**よ**。」とフィ**リ**ッ**プ**ス**が**自**信**あ  
り**げ**に**結**論**を**下**し**ました。

「メイ**ヴ**ィ**ス**とジミー**も**い**っ**し**よ**よ。」とキャン  
ディ**が**い**い**ました。「もし**か**した**ら**、桃**の**缶**詰**を  
あ**開**け**た**い**の**か**し**ら。」

「ふう**〜**ん。子**供**に**関**係**あ**り**そ**う**で**す**ね**。」とロッ  
ド。「魚**つ**り**に**行**く**準**備**で**も**して**い**る**ん**で**し**ょう  
か**ね**え。」

「もし**そ**う**な**ら、何**で**工**具**箱**中**を**探**して**る**ん  
だ**？**」とウィ**ル**キン**ソ**ン。

「ああ、思い出した。」 そう言うと、ジェフは  
木箱の中に手をつっこみました。「ジュディスが、  
ここに入れたって言ってたな。」

「メイヴィス、このスイス・アーミー・ナイフを  
ママのところに持ってお行き。明日の旅のために、  
今日ママがきれいにしておいて油を差しておいたろ  
う？」

「旅ですと？」 ウイングがささやきました。

「ジャックが旅に行くのかい？」

スタンリーが肩をすくめました。「そういうこと  
らしいな。」

「シーツ。」とクライン。「聞いてよ。」

「バックパックが1人に1つずつ。」 ジェフが  
メイヴィスとジミーに向かって話しています。「徒  
歩旅行に持ってくるのは、それだけだ。緊急事態  
が起こっても困らないように、この小さなナイフ  
は絶対に必要だからね。」

彼は立ち止まって、よく分かっているという表  
情でほほえみました。

「子供たち、これは良い例だ。」 ジェフはジャッ  
クを子供たちの目の前でふって見せました。「お

前たちも、この小さなスイス・アーミー・ナイフの  
ようになれるんだよ。」

「どんなふうに、パパ？」

「できる時にできるだけのことを学んでおくのさ。  
そうすれば、お前たちもいつでも役立つ者になれ  
る。特定のミニストリーの達人になる訓練を受  
けていようといまいと、他の技能を学んでおくこ  
とも大切だってことだ。すべての達人にはなれな  
くても、この小さなナイフのように、絶対に必要  
とされる何でも屋になれば、最高の何でも屋の  
達人になれるってことさ！」

「それ、どういうこと？」とジミーが聞きます。

ジェフがジミーに答えるのを聞いて、ジャック  
は大きなほほえみを浮かべました。「すばらしい  
能力だ。つまり、融通が効くってということだよ。」

— 終わり —

学習の目的：融通が効くことの大切さと利点を  
理解する。融通が効かないことからくる不利な点  
を学ぶ。

文：ギルバート・フェンタン 絵：ジェレミー

Copyright © 2011年、ファミリーインターナショナル

"Jacques-of-All-Trades"--Japanese

<http://www.mywonderstudio.com/level-2/2011/3/25/audio-jacques-of-all-trades.html>